
あの日に帰りたい～第二部～

サウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日に帰りたい〜第二部〜

【Nコード】

N68970

【作者名】

サウス

【あらすじ】

あの日に帰りたい第二部は私の高二の時の話を中心です。第一部より、ノンフィクション性を強めています。

第一章第一話（前書き）

衝撃的なタイムスリップから、一ヶ月が過ぎた。季節は夏から秋へと移ろうとしていた。

第一章第一話

衝撃的なタイムスリップから一ヶ月近くが経ち、季節は夏から秋へと秋の気配が忍びよってきた。もうすぐリハビリ病院から退院して、自宅に帰る時が近づいてきた。

リハビリ病院には、自分と似たような病気の人ばかりなので、車椅子でも違和感は無かったが、入院中にたまたまに自宅に外泊すると、自分は、社会的に、圧倒的に弱者になってしまったのだ、と実感することが多かった。

そんな世間に戻ることに私の心は不安でいっぱいだった。リハビリ病院からの退院の日が明日に迫ってきた。仲の良かった入院仲間も多くが退院していった。彼女と別れた私は、味気ない時間を過ごしていた。周りの人達には、強がっていたが、一人でいるときは不安でいっぱいだった。退院前日のリハビリも黙々と行い、最後の夜がやってきた、私は、現実の世界に不安がいっぱいなので、もう一度、タイムスリップすることを願ったが、全くその兆候は現れず、夜は白々とあけた。

第一章第二話（前書き）

退院の日の朝がやって来た。弟の車の窓から見る外の景色は、懐かしさよりも、私の不安を募らせた。

第一章第二話

あれだけ待ち焦がれた退院の時は淡々と過ぎた。退院後の生活の注意点を聞いて、4ヶ月半も過ごした病院を後にした。

迎えに来てくれた弟の車の中から見た景色は、私の不安など、意に介さないかのように晴れ渡っていた。

久しぶりに自宅に腰を落ち着けた私は、世間的には圧倒的に弱者であることを実感した。誰かの介助がないと家の中でも、一メートル先にも移動できないのだ。何故、こんな身体になってしまったのか？家から外へ出れないので、私はそんなことばかり、考えて、気持ちはどんどん沈んでいった。

第二部第一章第三話（前書き）

あれだけ待ち焦がれた自宅での生活は退屈で味気ないものだった。

第二部第一章第三話

せつかく、あれだけ待ち焦がれた自宅での生活も、退屈で味気ないもので、私は世間から取り残されている感じがして、焦りが強くなっていった。家族や友人は今ほゆつくり休んで体を治すことが先決と声をかけてくれたが、私はその言葉を頭では好意的に受け止めようとしたが、一人になると、深い絶望感に襲われた。私は、深い絶望の中で、偉そうな事を言っただけにした、あの高校時代のあの世界へまたタイムスリップしたくなかった。自分が経験した過去の世界と微妙に違うが、透明人間でも構わないので、自由に動き回れるあの世界へまた行きたくなかった。私は夜、ベッドに横たわって、あの世界へタイムスリップすることを強く願いながら目をつぶった。

第一章第四話（前書き）

どうやら私はまたタイムスリップ出来たようだ。問題はいつの時代にタイムスリップしたかと言うことだった。

第一章第四話

暗く、少し湿った匂いがした。私の故郷にある地下街へと繋がる懐かしいあの階段に腰かけているようだ。どうやら私はまたタイムスリップできたらしい。しかし問題はいつの時代にタイムスリップしたのか、ということだ。私はあの喫茶店に行けば、新聞でも読めるだろう、と思い、あのカフェバーもどきの喫茶店へ向かった。

地下街へと繋がる階段を上がり、地上へ出た。外はまだ昼間だった。季節はいつ頃だろうか？私はまた、透明人間になっているのだろうか？道行く人の視線だけではわからなかった。しかし、商店街のウィンドウに映ってなく、安心した。これである喫茶店にスムーズに入ることができる。

第一章第五話（前書き）

カフェバーもどきの喫茶店に入った私はそこで高二の時にタイムスリップできたことを知った。

第一章第五話

カフェバーもどきの喫茶店へは簡単に入ることができた。入り口付近でスポーツ新聞を広げているサラリーマンがいた。日付を見ると、昭和57（1982）年6月28日となっていた。どうやら私はうまいこと、高校2年時代にタイムスリップできたらしい。喫茶店でゆっくりとスポーツ新聞を読もうとしたときに、不意に肩を叩かれた。

「やつぱり戻ってきたのね。」そこには、私より先にこの世界へタイムスリップしてきた女がいた。「あなたは戻ってくると思っていたわ。」「なんでそう思った？」私は、少し不愉快な口調で聞いた。「だって、帰る理由がイマイチ釈然としなかったからね。本当は好きだった女の子にひどい形でフラれたんじゃないの？」凶星だった。しかし、小憎らしい女だった。

第一章第六話（前書き）

女の話を守るように、私は席を立ち、店を出ようとした。

第一章第六話

私は女の推測を遮るように、店から出ようとした。「この世界も、元いた世界よりも、ましな世界とは限らないわよ！」店を出る私の背中に彼女は現実的な言葉を浴びせかけた。わかつているよ、そんなことは。でも、少し愉快じゃないか？二つの世界、人生を楽しめるなんて、と私は自分に言い聞かせて、夕暮れの繁華街を歩いた。

どこでもドアを使えば、すぐに自分の家に帰れたのだが、私はバスに乗って帰りたくて、静岡の駅付近にあるバスターミナルへ向かった。丁度、私の自宅方面へ向かうバスが出るところだった。バスはゆっくりと出発した。

第一部第七話（前書き）

パスは海近くの自宅へ向かった

第一部第七話

前回、タイムスリップした時から4ヶ月ぐらいしか経っていなかった。あまり窓の外の景色は変わらなかった。相変わらず、のんびりとした、しかし、どこかホッとさせる風景だった。バスは、のんびりした速度で、私の自宅近くの終点のバス停に近づいていた。私の好きだった海へと繋がる一本道をバスは走り続けた。バスは少し上り坂の道を走り、終点の一つ手前のバス停を出て、すぐに右折した。乗客は誰もいなくて、終点のバス折り返し所に着いた。私は運賃を数える運転手を横目にバスを降りた。こういうとき、運賃を払わなくて良いから、透明人間は気楽だ。私は折り返し所近くの自宅に向かった。

第一章第八話（前書き）

久しぶりに帰った我が家は変わっていなかった。

第一章第八話

久しぶりの自宅は変わっていなかった。それは当たり前だった。

何か月しか経っていないのだから。開けっ放しの玄関から二階の自分の部屋に向かった。そこには高校2年のまだ若い小僧の私がいた。机に向かって、何か、難しいことでも考えているのか、何度も深い溜め息をついている。「みやび・・・」あんなに手酷くフラれたのに、まだあの女のことを考えているとは。あんなにこっぴどくフラれた女の名をため息つきながら、まだ思い続けているとは、未練がましい奴だった。私はできることなら若い私に、まだ人生は長い、これからもいろんな女と知り合うぞと耳打ちしてあげたかった。しかし、ここは私の経験してきた過去とは微妙に違うから、確実にそうなるとは言えなかった。これは良いことなのだろうか？この世界での私の未来はどうなるのだろうか？

次の日、私は高校2年になった若い私が学校へ行った後、私も久しぶりに母校へ行くこうと自室の壁にどこでもドアを呼び出そうとした。しかし、どこでもドアは現れなかった。手順などなく、強く念じればよいはずだったが、いつまでも現れなかった。私は焦りまくった。どこでもドアはもう使えないのだろうか。私は不安でいっぱいになった。

第一章第九話（前書き）

母校へ行こうと念じたどこでもドアはいついっとうに現れなかった。

第一章第九話

母校へ行こうと思ったところでドアは何度念じても、壁には現れなかった。私はどこでもドアを出すことをあきらめて、久しぶりに故郷の海へと向かった。時間は午前中だが、陽射しは強く、夏の到来が近いことを感じさせた。

故郷の海は、遊歩道になった堤防があり、散歩するには都合が良かった。この世界でこれからどうしたら良いか、考えながらブラブラと歩いた。故郷の海は台風シーズン前で穏やかな海だった。私は潮の匂いを一身に浴びて、いい気分で遊歩道を歩いた。この世界が私の経験した過去と同じような感じならば、忌まわしい思い出たつぶりの高校2年の修学旅行が秋にあるはずだった。私は憂鬱な気持ちになった。

第一章第十話（前書き）

高一の秋に進路コースの選択があり、私は文系を選択して、そして、腐れ縁ののぶひでと同じクラスになった。

第一章第十話

高校1年の秋に進路コースの選択があり、文系を選択した私は、1年の時に仲が良かった仲間が皆、理系に進み、私は、このクラス替えて、腐れ縁の友、のぶひでと同じクラスになる。これは私の経験した過去と同じになってほしくなかった。私は都合の良い希望を願った。

高校2年のクラス替え自体はまあ可もなく不可もなくという感じだった。風の噂で、みやびも文系を選択した、と聞いていたので一緒のクラスにならなかったことがせめてもの救いだった。部屋にクラス名簿があったので、自分のクラスを見てみた。私はそのページを見て一気に暗くなってしまった。そこには、のぶひでの名前があった。私はブルーになった。この世界ののぶひでが良い奴であることを祈ろう。

第二章第一話（前書き）

私がこの世界に再びタイムスリップしてから、10日が過ぎた。

第二章第一話

私が再びこの世界にタイムスリップしてきてから、10日経った。暦は7月になり、もうすぐまた夏休みが始まる。この頃は、退屈な毎日だったけど、社会人になるとその時の貴重さが良くわかる。大人になって、自分である程度稼げるようになったが、同時に自由も失ってしまった。退屈なほどたくさんあった自由を。

もうすぐ夏休みだと言うのに、相変わらず、若い私は女の子の気配は感じられない生活を送っているようだった。みやびにフラれたシヨックからまだ癒えていないのか、冴えない毎日を送っているようだった。階段を上る音が聞こえてきた、若い私が学校から帰ってきたようだった。

第二章第二話（前書き）

若い私は口笛を吹きながら、何やら機嫌良さげに、階段を上がってきた。

第二章第二話

若い私は、口笛を吹きながら、なんだかご機嫌だった。夜になって、電話がかかってきた。どうやら、話の相手はのぶひでらしかった。「おう、じゃあ、明日、学校の帰りにお前の家にいけばいいんだな。お前と一緒に帰ればいいんだな。わかってる。誰にも言わずにいるよ。」これは、私の記憶どおりなら、ろくでもない出来事の中に始まりだった。私の記憶どおりなら、この、のぶひでという男はどうしようもない奴だった。救いようがないという言葉は、彼の為にあつた。私は、どこでもドアで母校に行けないことを悔やんだ。しかし、午後の下校時間を過ぎたころ、部屋の壁にどこでもドアが現れた。ドアをくぐると、小汚ない部屋に出た。

第二章第三話（前書き）

私の記憶どおりの奴なら、このぶひではどうしようもない奴だった。

第二章第三話

私の記憶どおりなら、この、のぶひでという男はどうしようもない奴だった。救いようがないという言葉は、彼の為にあった。私は、どこでもドアで母校に行けないことを悔やんだ。しかし、午後の下校時間を過ぎたころ、部屋の壁にどこでもドアが現れた。ドアをくぐると、小汚ない部屋に出た。

微かな記憶をひもとくと、そこはのぶひでの部屋だった。着古した洋服やらTシャツがそこかしこに脱ぎ捨ててあった。部屋の主の性格を反映した部屋だった。部屋の真ん中には、テーブル代わりに使っている家具調のこたつがあった。そのこたつの上には、何かを飲んだ後のコップと吸い殻が山盛りになった灰皿があった。何で、こんな奴と仲良かったのだろう。まさに若気の至りというやつだった。

第二章第四話（前書き）

誰かが階段を上ってくる足音が聞こえた。のぶひでの鼻づまりの声
が聞こえてきた。

第二章第四話

誰かが階段を上がってきた。のぶひでと若い私だった。「絶対、誰にも言うなよ！」懐かしい、鼻づまりののぶひでの声だった。「わかってるよ。しつけない。」何やら、好きな女の子といちゃついた話らしい。相変わらず、存在自体が軽い男だった。

のぶひでは煙草に火をつけて、深々と吸った。若い私もテーブルの上のセブンスターをくわえて、吸い始めた。のぶひでが怪しげな粉末を取りだし、煙草の吸い口に塗り込み、吸い始めた。「おおー、きたきた。強烈だぜ。おれの中学の先輩が誰にも言うなよ、て、くれたんだ。おまえもやるか？」挑発的な口調で問いかけてきた。

第二章第五話（前書き）

白い粉末は良く見ると透明な結晶状になっていた。

第二章第五話

白い粉末は、良く見ると小さな透明な結晶の集まりだった。「それを吸ったら、すげえいい気持ちになるぜ。ただし、当然お前も捕まったら同罪な。」なぜか勝ち誇ったような表情で、のぶひでは若い私を見下ろしていた。憎たらしいやつだった。若い私は、迷った揚げ句に「誰にも言わねえから、俺にもくれ。」ビビりながら、怪しげな粉末をもらい、煙草の吸い口に結晶を埋め込んで、火で炙ってフィルターに溶かした。若い私は意を決して、煙草を深々と吸い込んだ。

第二章第六話（前書き）

さんざん迷った揚げ句に若い私は深々と煙草を吸い込んだ。

第二章第六話

さんざん迷った果てに深々と煙草を吸い込んだ若い私を見て、のぶひでは笑い転げた。怪しげな粉末はハツカだった。確かに、普通の煙草と違い、スーッとした爽快感のようなものはあるが、それだけだ。のぶひでにいつぱい喰わされたのだ。こいつは何度見ても、腹ただしく、憎たらしい奴だった。「ばかばかしい。俺は帰る。」憤然として、若い私は立ち上がりかけた。「まあ、ただの可愛い冗談じゃねえか。本題の話を教えてやるよ。」のぶひでは笑いをこらえられず、爆笑しながら、若い私を引き留めようとした。私はその手を振り切って帰ろうとした。

「実は、俺のつきあっている女の子と同じ学校の女の子をお前に紹介してやろうと思つてな。」若い私は、すぐに座り直した。

第二章第七話（前書き）

のぶひではいけすかない奴だったが、いつも彼女がいた。

第二章第七話

のぶひではいけすかない奴だったが、不思議と彼女がいつもいた。その当時、のぶひでが付き合っていた女の子は、市内でも屈指の可愛い女の子が多い高校の女の子だった。しかし、この展開は私の経験とは違うものだった。はたして、のぶひではどんな女の子を紹介してくれるのか？

のぶひでが今付き合っている女の子は可愛いと、のぶひでの彼女を見た、同じ学校の奴が言っていた。その彼女と同じ学校の女の子とは。若い私はかなり期待しているようだった。

「お前のところに今夜にでも電話して、何時紹介できるか伝えるよ。」「よろしくお願いいたします。」完全に立場はのぶひでが上となった。

第二章第八話（前書き）

若い私は揉み手をしながら、のぶひでに媚びを売るように頼み込んだ。

第二章第八話

若い私は、揉み手をしながら、「それじゃのぶひでさん電話まっています。」完全に主従関係は逆転していた。「ひとつよろしくお願ひしますよ。大将！」卑屈なくらいに低姿勢になつた若い私は、何度もお願ひした。のぶひでは悠然と胸を反らせながら、「わかつたよ。心配するな。」と偉そうに私の肩を叩いた。私は頭を下げながらのぶひでの家を後にした。

真夏の暑さが和らぎ始めた夕暮れ時に、若い私はのぶひでの家から帰つて来た。夜になつて、夕食を食べ終わり、自室にこもり、のぶひでのからの電話を待った。そして夜9時を回つたところ、電話があつた。「今度の土曜日の夕方4時に俺の家に来い。その時に紹介するよ。」「ありがとう。のぶひで、おまえつて、本当にいい奴だな。」「これから俺のことを尊敬しろよ。」「ああ」絶対に守らない誓いを若い私は交わした。

第二章第九話（前書き）

高一の夏休みが始まるうとしていた。

第二章第九話

もうすぐ高校二年の夏休みが始まる。若い私は、みやびにフラれて以来、気が抜けた毎日を送っていた。しかし、こののぶひでの紹介でまたハッピーなハイスクールライフを送れるのでは、と過大に期待していた。そして運命の土曜日がやって来た。

待ちに待った土曜日、若い私は、一度家に帰り、私服に着替えてから、のぶひでの家へと向かった。約束の4時の30分前にもぶひでの家に着いてしまった。私は自室からどこでもドアでのぶひでの部屋に直接来た。若い私の表情を観察すると顔が上気して、赤くなっており、緊張しているのが明らかにわかった。

「そんなに固くなるなよ。」のぶひでのからかい気味の声も、若い私には届いていないようだった。

第二章第十話（前書き）

女の子が二人のぶひでの部屋に入ってきた。一人は何となく見覚えがある、多分、のぶひでの彼女だ。そしてもう一人の・・・

第二章第十話

運命の時間が近づいてきた。あと5分で4時というところで、のぶひでの家のチャイムが鳴った。のぶひでが階下に出迎えに行った。にぎやかな声が聞こえてきた。女の子の声だった。先にのぶひでが入ってきた。後から2人女の子が入ってきた。のぶひでのすぐうしろにいる女の子は一度だけ見かけたことがある、ちーとのぶひでが呼んでいる、のぶひでの彼女だ。そしてその子の後ろに、髪は肩に少しかかるくらいの長さで、身長は160センチぐらいだろうか?「はじめまして。みよこって言います。皆にはミーコって呼ばれてます。」とその女の子は涼やかな声で自己紹介した。

第三章第一話（前書き）

若い私は激しい衝撃を受けていた。ミコはみやびに本当にそっくりだったからだ。

第三章第一話

若い私は激しい衝撃を受けていた。ミーコと呼ばれている女の子は、みやびに良く似ていた、というか、そっくりだった。若い私は、どもりながら自己紹介した。ミーコにはその自己紹介が受けていた。何が功を奏するかわからないが、とりあえずのぶひでの部屋のテーブルを囲んで座った。まじまじと対面に座ったミーコを見ると、本当に良くみやびに似ていた。「そんなに気に入ったからって、じっくり見つめるなよ。」のぶひでがからかいながら、若い私をぢゃかした。ミーコは顔を真っ赤にして、「からかわないですよ。のぶひでくん!」とのぶひでに抗議していた。「ミーコも家が橋の向こうなの。帰りは送ってあげてね。」ちー、ナイスフォローだ。若い私は嬉しそうにうなずいた。

第三章第二話（前書き）

のぶひではろくでもない男だったが、時々使えるヤツだった。

第三章第二話

のぶひではろくでもない奴だが、時々使える奴だった。若い私は、ミーコとともにのぶひでの家を出て、ミーコと一緒に自転車を並べて帰った。しかし、何を話したら良いのかわからず、会話は途切れ途切れになった。「家はどの辺なの?」「橋を渡って、まっすぐ行くの。」「分かれ道に差し掛かる前に電話番号を聞かなければ。

ミーコとの分かれ道が近づいてきた。若い私は他愛もない話をし、ミーコの気をひこうとしていた。私は、若い私と同化していた。意を決して、ミーコに電話番号を聞いた。ミーコは戸惑っていた。もうすぐ分かれ道だ。だめかな、と、諦めかけた瞬間……

第三章第三話

「まだ会ったばかりだから、電話番号は教えられないけど・・・」
若い私は唾を飲んで、次のミーコの言葉を待った。そして、予想外の言葉が聞こえてきた。「次の日曜日なら、この先の公園でなら、会えるよ。」若い私は、聞き違いではないかと思い、ミーコに確認した。時間は午後3時で間違いなかった。若い私は、ミーコと別れ、夢心地で帰った。まさに夢見心地とはこのことだろう。若い私は、はやる気持ちを抑えられずに、のぶひでに電話した。「おう、次の日曜日に公園でデートするらしいな。」「さすがのぶひでさん、耳が早いですね。」「若い私は、電話に向かって頭を下げながら、のぶひでに低姿勢で応えた。」「ミーコもお前のことまんざらでもないみたいだぞ。頑張れよ。」「ほんとかつ！ありがとう、のぶひで。やつぱり頼りになるなお前は。」「適当なお愛想を言っつて、電話を切った。高二の夏は楽しくなりそうだった。

第三章第四話（前書き）

来週はもう夏休みに突入するという週末の日曜の夜、若い私は浮かれていた。

第三章第四話

来週はもう夏休みという週の月曜日の夜、若い私は、すっかり浮かれ気分でした。早く次のミーコに会える日曜日が待ち遠しかった。しかし私は不安だった。こんなにトントン拍子に事が進んで良いものだろうか？この世界は、私の過去と似て非なるものだから、すんなりとうまくいくかもしれない、しかし・・・、私は激しく悩んだ。私がこんなに激しく思い悩むのは、私の今までの人生で、悪い予感は今よく当たる傾向にある、という事だった。まあ、まだ起きてもないことを心配しても仕様がなない。若い私は、生来の楽天的な傾向を日ごとに強め、そして運命の日曜日がやって来た。

第三章第五話（前書き）

若い私にはやる気持ちを抑えつつ、自転車をこいで待ち合わせの公園へと向かった。

第三章第五話

若い私は、はやる気持ちを抑えながら、自転車をこいで、ミーコと待ち合わせる予定の公園へ向かった。透明人間の私は若い私に同化して、事の成り行きを見守った。公園には約束の午後3時の30分前に着いた。まだ約束まで時間があるのに、胸の鼓動はどんどん高鳴っていった。ミーコとの約束時間まで、あと5分になった。ミーコは果たしてどこから来るのか？若い私の緊張は最高潮に達した。

約束の時間から二時間が過ぎた。ミーコは来なかった。若い私は、大きくため息をついて、自転車に跨がって、家に帰った。肩を落としながら。

第三章第六話（前書き）

若い私は家に帰るとすぐにのぶひでに電話した。

第三章第六話

若い私は家に帰るとすぐにのぶひでの家に電話した。しかし、のぶひでは留守だった。まだ携帯電話などない時代だったから、のぶひでからの電話を待つしかなかった。若い私は、揺れる思いで胸がいつぱいで、ベッドに倒れ込むように、眠ることしかできなかった。母の呼び声で若い私は目を覚ました。「のぶひでくんから電話だよ。」少しだけ眠ったはずなのに、あたりはすっかり暗くなつて、時計は夜9時を回っていた。私は電話に出た若い私と同化した。のぶひでが相変わらずの調子良い口調で話し始めた。「どうだった、初デートは?」「どうもこうもねえよ。」「何だどうしたんだよ。」「来なかつたから、話しようがねえよ。」「どうして?」「それは俺が聞きてえよ。」「のぶひでは気まずく沈黙した。」

第三章第七話（前書き）

「わかった。ちーに聞いてみるよ。」のぶひではそう言ってくれた。

第三章第七話

「わかった。ちーに聞いてみるよ。さっきまで、あいつと一緒にいたから、あいつもまだ事情はわからないかも知れないけど。」のぶひでは少し、戸惑ったような声で言った。「悪いな、手間かけて。」若い私は、落ち込んだ声で言った。「元気だせよ。なんか、ミーコにも事情があつたんだよ。」「サンキュー。わりいな、若い私は、力なく受話器を置いた。」

その夜22時過ぎに、再びのぶひでから電話があつた。「ちーがミーコに電話して、ようやく事情がわかつたぞ。」「何だつて？」若い私は、気持ちをはやらせて聞いた。「どうも、急用で親戚の家に行っていて、約束の時間には行けなかつたらしい。」「ふーん。」白々しい理由だつた。

第三章第八話（前書き）

「何か都合のいい言い訳だな。」
「若い私は疑うように言った。」

第三章第八話

「何か都合のいい言い訳だな。」「そんなにひねくれた言い方するなよ。実はいいニュースがある。あのな、ミーコからちーを通じて、おまえの都合が良ければ、来週の日曜日、同じ場所で同じ時間に会いたいと言ってきたけど、どうするよ？」「ぜひよろしくお願いいたします。」「それじゃ、ちーに言うておくぞ。」「若い私は喜色満面で電話を切った。なんか、振り回されている感じだが。高二の夏休みが、週末からはじまろうとしていた。私の記憶では、高二の夏は、気持ちだけが空回りして、大した出来事もない寂しい夏だったはずである。強制的に参加させられた高校野球も、母校はアツサリ負けて、何も無いつまらない夏だった。だから、私は疑いの気持ちが強まっていった。しかし、若い私は浮かれていた。そして日曜日になった。

第三章第九話（前書き）

ミコとの再度の約束の日曜が来た。

第三章第九話

ミーコとの再度の約束の日曜になった。私は今度は若い私と同化せず、どこでもドアで公園のトイレに現れ、二人の成り行きを見守った。そして運命の待ち合わせ時間が来た。公園の東側の方から、ミーコが現れた。ミーコはぐるりと公園の中を見回し、若い私の姿を見つけて、小走りに近づいてきた。

ミーコが若い私の姿を見つけて、駆け寄ってきた。私は、若い私と同化した。ミーコが目の前にやって来た。「この間は、来れなくて本当にごめんなさい。連絡する方法を思いつかなくて。」ミーコは初めて会った時と同じ、涼しげな声で謝ってきた。「気にしてないから、そんなに謝らなくていいよ。」若い私は、やせ我慢して答えた。本当にすごいやせ我慢だ。あんなに落ち込んでいたくせに。とにかくミーコとの初デートが始まった。

第四章第一話（前書き）

ミコは海が見たいと言って、公園から出ようと、若い私を促した。

第四章第一話

ミーコは「海を見に行きたいな。」と言って、公園から出ようと、若い私を促した。二人揃って、公園を出ようとしたところ、刺すような鋭い視線を感じた。公園の出口付近に停めている素晴らしく品のいい外観の暴走族風の車から、これまた絵にかいたような暴走族風のアンちゃんが降りてきて、まっすぐこちらへ向かってきた。

若い私はこの当時身長は180センチ位あり、大きかったが、へたれだった。口ではいつも強がりと言っていたが、素手の喧嘩は中三以来していなかった。しかし、目の前に迫ってくるヤンキー兄ちゃんは喧嘩慣れしてそうだった。兄ちゃんはタバコを道路に投げ捨て、私の方ではなく、ミーコに話しかけた。

「どういうことだよ。ミーコ?」「あんたには関係ないよ、あんたはもう別れたんだから。」「ミーコは冷たく、ヤンキー兄ちゃんに言い放った。

第四章第二話（前書き）

やんきい兄ちゃんの前を通り過ぎようとした。しかし……

第四章第二話

ヤンキイ兄ちゃんの顔色が見る見るうちに赤く変わっていった。

「行こつ！」ミーコが若い私の手をとり、男を無視して通りすぎようとした。しかし、ヤンキイは「待てっ！」と低くどすの効いた声で吠えた。人生はドラマのように、都合良く、かつこよく行かない。その事を私は違う世界でも味わう羽目になった。ヤンキイ兄ちゃんが吠えて、若い私の襟首を掴んだ。ヤンキイは若い私より小柄だったが、喧嘩慣れしていそうだった。

「嫌がつてるんだから、やめろよ。」「うるせえ！」ヤンキイは凄むと同時に、若い私の鼻先に殴りかかった。

第四章第三話（前書き）

目の前で火花が散った。喉の奥で鉄の味がした。

第四章第三話

火花が目の前に散った。喉の奥に鉄の味がした。鼻血が大量に流れているのだろう。ミーコが何か叫んでいるが、良く聞き取れなかった。若い私は、サンドバッグのように殴られ、そして意識が薄れていった。

気がつくと、若い私は道路のはしに寝転がっていた。ミーコはいなかった。ヤンキイの車に乗せられて、どこかに連れ去られたのか？若い私は、ぼろぼろの体で自転車に乗り、家に帰った。家に着くと、ぼろぼろの服を脱ぎ、Tシャツを着て、ベッドに潜り込み、悔し泣きの嗚咽を漏らして、眠りに落ちた。

第四章第四話（前書き）

「のぶひで君から電話だよ。」階下から母の声で若い私は目を覚ました。

第四章第四話

「のぶひで君から電話だよ。」階下から母が呼ぶ声で若い私は目を覚ました。「ひでえ目にあつたみてえだな？」どこか含み笑いをしているような声が聞こえてきた。「めちやくちやに殴られたよ。」若い私は不貞腐れて応えた。私も若い私に同化して、のぶひでの話を聞いた。「ちーにミーコから電話があつた。ミーコはおまえに悪いことをしたと泣きじゃくっていたらしいぞ。」若い私は唇を噛んで、悔しさを堪えるしかなかった。結局、ミーコはその事が原因で二度と会うことはなかった。辛い高二の夏休みのスタートだった。のぶひでも何となくばつが悪いのか、あれからは連絡が無かった。毎日やることがないので、ラーメン屋の出前のバイトに精を出した。時給は400円、夕方5時から夜22時過ぎまで働いた。このバイトは高一の夏から高三の夏までやった。時給は安いが、何故か長く続いた。

第四章第五話（前書き）

このラーメン屋は叔母の家の近くにあり、幼い頃から店の雰囲気なども良く知っていた。

第四章第五話

このラーメン屋は、叔母の家の近くにあり、店の主人も昔から知っており、店の雰囲気も知っていた。そんなところも長続きた秘訣だったかもしれない。しかし、自転車での出前は辛かった。特に大家族の家への日曜の夜の出前はキツかった。そんな中で、ある建設会社の社長の家は、必ずチップをくれたので、嬉しかった。バブル崩壊で、その家ももうない。悲しいが。

そんなバイトに明け暮れた高二の夏休みだったが、出会いのチャンスが、まったく無かった訳ではなかった。この世界が私の高二時代と酷似しているなら、あの出来事があるはずだった。あの魅力的な出来事が。

第四章第六話（前書き）

夏らしい暑い日が続いた。

第四章第六話

連日、夏らしい暑い日が続いた。夏休みも後半になった日の昼下がりに、電話がけたたましく鳴った。電話をかけてきたのは、近所に住む、同じ中学出身のミクという女の子だった。確かこの子は私学の高校に行っていたはずだ。「これから、ちょっと行っていい？」誘うような声が受話器の向こうから聞こえてきた。

ミク、懐かしい名前だった。その名前を聞くと、甘酸っぱくて苦々しい思い出が甦る。私の経験した過去では、非常に悔しい思いをしたが、この世界ではどうだろう。私の経験した過去より、少し時期が遅い気がするが。

第四章第七話（前書き）

ミクからの突然の電話に私は激しく動揺した。

第四章第七話

ミクは私の家から歩いて5分位の近所に住んでいた。小学校を卒業したころ、街中から越してきた。可愛い子だな、と思っていたが、それだけだった。それにミクは私と同じ中学から同じ高校に進んだ七見と付き合っているはずだった。若い私はかなり混乱していた。

ミクがやって来た。ホットパンツと半袖ブラウスという軽装だった。「夏休みの宿題でわからない所があるから、教えて？」ミクは首を傾げて言った。今、考えるとミクは明らかに誘っていたのだ。しかし、唐変木の若い私は、ミクの突然の訪問に戸惑いながら、自室に案内し、勉強を教えている。哀れな奴よ。

第四章第八話（前書き）

私は昔から妙なところが真面目といつか融通がきかなかつた。

第四章第八話

私は昔から妙なところが融通がきかないというか、固いところがあった。私は若い私と同化しないで、彼の行動を見ていた。ミクは私の対面に座った。私の遠い昔の記憶によれば、ミクとは、中学一年の時に、同じクラスだったはずだ。でも、その頃の詳しい記憶はない。若い私は明らかに、どうしたら良いのか、困り果てていた。

ミクが「これどういう意味だろう？」と身を乗り出して、ある英単語の意味を聞いてきた。いい匂いがした。若い私は、何とか理性を保っているようだった。しかし、ミクは明らかに誘っていた。外から見ていると、それがはつきりわかった。ここまでは私の昔の記憶とほぼ一致する。ここからミクはどう動くだろう。

第四章第九話（前書き）

若い私は一大決心をしたようだった。

第四章第九話

若い私は、何かを決意したようだった。ミクと七見との間で揺れ動いていたようだったが、自分がこれから取るべき行動に踏ん切りがついたようである。若い私は、ミクを抱き寄せようとした。「ただいま。」母の声が、玄関から聞こえてきた。どうやら、この件は私の記憶どおりになりそうだった。階下から母が「誰か来てるの？」昔から、絶妙なタイミングで現れる母であった。ミクは母に「ミクです。お邪魔してます。」ミクはそつなく、母に挨拶した。「夏休みの宿題で、わからない所があるっていうから教えてたんだよ。」若い私は言い訳めいて答えていた。「なんか邪魔しちゃってごめんなさい。」母はそう言いながら、出ていった。本当に邪魔だった。

第五章第一話（前書き）

ミクとは何事もなく終わった。淡い期待だけを抱かせて。

第五章 第一話

ミクとは何もなく終わった。あっさりとそのくさと帰っていった。若い私に淡い期待だけ抱かせて。

高二の夏休みも過ぎ去ろうとしていた。そんなある日、俊ちゃんから電話があった。俊ちゃんとは、進路の違いから、理系に進んだ俊ちゃんとは、クラス替え当初は疎遠になっていたが、この頃、また仲良くしていた。

「明日暇だったら、S海岸へ泳ぎに行かねえ？」ミコとの一件以来、大して面白いことがなかった若い私は、「おお、行くよ。」と即答した。女の子はいそうもなかったが、これが私に似合いの夏休みの感じがした。

第五章第二話（前書き）

S 海岸へ泳ぎに行く日は絶好の海水浴日となった。

第五章第二話

S 海岸に泳ぎに行く日は絶好の海水浴日和となった。俊ちゃん達と海へ行くのは、記憶どおりで、時期も合っていたように思う。S 海岸は少し遠くて、自転車では行けなかった。若い私は、学校に隠れて、原付免許を取り、バイト代でスクーターも買っていたので、同じようにスクーターを持っている俊ちゃん達と俊ちゃんの家に集まり、S 海岸へと向かった。スクーター集団は全部で五台。まだ、原付はヘルメットを被らなくて良い時代だったので、風を切って海に向かった。S 海岸まで小一時間の短いツーリングだったが、すごく気持ち良くて、ツーリングを満喫した。女の子と付き合うことが出来なかった高二の夏休みだったが、何故か、充実した気分で夏を送れた。

第五章第三話（前書き）

S 海岸は遠浅で海水浴に適した海岸だった。

第五章第三話

S海岸は遠浅で、海水浴には最適の海岸だった。泳いだり、砂浜にジャンケンで負けて埋まったりした。しかし、一番楽しかったのは、行き帰りのツーリングだった。こうやって気が合う仲間達と走っていることが一番楽しい時だった。夏が終わろうとしていた。若い私は、昼間から自室でレコードを聞いている。まだ、CDが普及しておらず、レコードがまだまだ主役だった。聞いているのは、サザンの当時の新しいアルバムである「人気者で行こう」のようである。海がそばにあり、サザンや気が合う友達が近くにいる。何故私はこんなに恵まれた環境の故郷を捨てて、東京に行ったのだろうか？私は溢れでる涙を堪えることが出来なかった。

第五章第四話（前書き）

人生はどう転ぶかわからない？だから面白いのだろう。

第五章第四話

人生はどう転ぶかわからない。ここに留まっていたら、高校卒業後、どんな出会いが会っただろう。これ以上、仮定のことを考えても、仕様がなない、と私は気持ちを切り替えた。今日で夏休みは終わり、明日からは、新学期だ。どんな出来事が待っているだろう。

高二の秋といえば、思い出したくないイベントがたくさんあったが、そのなかでも、修学旅行はその筆頭の出来事だった。この世界での旅行はどうだっただろうか？ 高校の修学旅行は、県の補助金カットが原因で、中学の時と同じ場所の京都と奈良だった。確か、先生方が作った旅行のしおりのタイトルが「京都・奈良再発見」だった。今、考えると皮肉めいたタイトルである。ここまでは、私の過去と同じだ。何だかドキドキしてきた。

第五章第五話（前書き）

修学旅行初日の朝は、快晴だった。

第五章第五話

修学旅行初日の朝は快晴だった。私達は新幹線に乗り込み、若い私のはのぶひでと同じ座席に座った。ここまでは私の記憶どおりだ。しかし決定的に違っていることがあった。私の記憶どおりであれば、若い私は修学旅行前日に行きつけの床屋でキツイパーマをかけたはずである。しかし、この世界の若い私は、パーマなどかけずに旅行に向かった。細かい事だが、微妙に違っているのである。

新幹線の中で、私は若い私とのぶひで見える席に座った。二人は大して意味がない会話をしているようだ。のぶひでも床屋に行っただけのようで、パーマがばっちりかかっている。当時の高校の校則では、パーマは禁止だった。しかし、ダメと言われるとやりたくなるのが、この年頃である。今考えると、あまり格好良いとは思えないが。新幹線は京都に到着しようとしていた。

第五章第六話（前書き）

京都へ着いた。高校生達は、行き先に不満ながらもどこかウキウキしていた。

第五章第六話

京都へ着いた。高校生達は、行き先に不平不満を漏らしながらも、やはりどこかウキウキと浮かれていた。若い私は、クラスの中で決めた班ごとに別れ、名所や史跡を観光した。ここまでは私の記憶どおりだ。ということはあのついでにない出来事もそのまま起きるのだろうか。興味津々である。京都へ着いて、最初はすっかりと名所巡りをしていたが、のぶひでの班と一緒にってから、少し様子が怪しくなってきた。本当にこの男と一緒にしなければ、と、後年良く思った。若い私はのぶひでとともに大阪でお好み焼きを食べることにした。電車での行き方は、のぶひでが全部調べていた。こういう所は妙に気がきくやつだった。

第五章第七話（前書き）

京都から名前は忘れたが、何とかといい私鉄電車に乗り、のびひでと若い私は大阪に着いた。

第五章第七話

京都から、何とかという私鉄電車に乗って、大阪のグリコのかい看板近くのお好み焼き屋にのぶひでと二人で入った。店に着いた事で安心した若い私達は、おもむろに制服のポケットから、煙草を取り出し、一服した。すぐに若い店員がやって来て、「学生服での喫煙は遠慮してもらえますか？」と関西のトーンで注意された。へたれの私達はすぐに煙草を消して、なんとなく居心地も悪くなって、お好み焼きも食わずに、店を出て、結局、小心者の二人は京都へ戻って行った。

関西のやんきい兄ちゃん達にからまれずに無事に京都の仲間達に合流することが出来た。ここまでは、私の記憶どおりだ。そして、あの出来事が起こる夜がやって来た。

第五章第八話（前書き）

風呂に入り、夕食を食べて、一息ついた若い私達は、心地好い気分だった。

第五章第八話

風呂に入り、夕飯も食べて、いい気分です。若い私は部屋に戻った。部屋に戻ると、のぶひでが「トイレで一服しようぜ」と誘ってきた。若い私は危険を感じ、躊躇した。「何びびってんだよ。」「のぶひでが挑発してきた。憎たらしいやつだった。部屋のトイレで一服はリスクが高かった。のぶひでは「せーじに見張りをやってもらうから大丈夫だ。なっ、せーじ?」「パシリのせーじは「任しとけよ。」と安請け合いました。若い私は、どんどん不安そうな顔つきになっていった。

第五章第九話（前書き）

ドキドキしながら、若い私はのぶひでと一服した。

第五章第九話

ドキドキしながら一服した。のぶひでは「やっぱり食後の一服はたまらねえな。」と聞いたような口ぶりで、つぶやいたが、心の中は、ビビっている、と私はいらんだ。へたれ同士、へたれの気持ちには手にとるようにわかるのだ。換気扇はつけていたが、トイレの中は煙で前が見えなかった。その時、「ドンドン！」と激しく扉が叩かれた。「お前ら、ここで何してる！ここを開けろっ！」「こわもての生活指導兼体育教師の声だった。急いで、トイレの天井の換気口に吸殻を隠したが、臭いは消せなかった。「ここを開けろっ！」「体育教師の声はヒートアップしていった。のぶひでが観念してドアを開けた。真っ赤な顔で、憤怒の表情の体育教師がトイレに入ってきた。

第五章第十話（前書き）

「煙草を刷ってたな？」 体育教師が詰問した。

第五章第十話

「煙草吸ってたな？」この臭いと煙では、言い逃れできずに、私達はうなだれて認めるしかなかった。「廊下に出る。」体育教師は廊下を指さした。まったく、見張りのせーじは何をしていたのか？若い私はせーじを探した。せーじは布団に横たわり寝ていた。多分寝たふりだろう。「役に立たねえ。」若い私はそうつぶやいて廊下に出た。ツイテいなかった。廊下に出た若い私達を体育教師は正座させた。そして、ドスの聞いた声で「煙草はいつも吸っているのか？」「いえ、初めてです。」パンツと左頬に衝撃が走った。体育教師がビンタした。この頃は、鉄拳制裁オツケーの時代だったから、教師達も思い切り殴り放題だった。高校は義務教育ではないから、中退しても構わない、と言う考えだったのだろう。

第五章第十一話（前書き）

のぶひでが集中的にピンタされていた。

第五章第十一話

のぶひでが集中的にビンタされていた。涙を流して、許しを乞うても、体育教師のビンタの嵐は止まなかった。次は自分の番だと、若い私は固唾を飲んで、身構えていた。のぶひでへの折檻は終えた。「次はお前に聞く。」地獄の底から、鳴り響くような低い声が聞こえてきた。

バシツ、鈍い音がし、若い私は左頬を抑えた。「お前らは何か悪さすると思つて、新幹線の中から目をつけていたんだよ。」体育教師は自慢気に話していた。まるで、警官気取りだった。「でも、こんなに早く足を出すとはな。」体育教師は言うが早く、ビンタの嵐を若い私に降らせた。若い私はノックアウト寸前だった。

第五章第十二話（前書き）

体育教師のビンタの嵐は執拗に続いた。

第五章第十二話

ビンタの嵐は執拗に続いた。体育教師は「お前ら、もう学校やめちまえ。」と人の一生を左右するような事を軽々しく口にした。その口車に乗れば、ビンタの嵐は止むことはわかっていたが、へたれの若い私はその言葉に同意しなかった。中退する勇気などなかった。「お前なんか、絶対に大学なんて行けねえよ。」この一言が若い私の心に火をつけ、若い私を進学へと駆り立てることになった。少し折檻が止んで、周りを見渡す余裕ができた。正面の部屋の玄関付近の廊下を見ると、同じように煙草で捕まったと思われる男達が正座して殴られていた。この狂気に満ちた折檻はいろいろと殴る人が代わりながら明け方近くまで続いた。

第六章第一話（前書き）

「親を呼んでるからな。」
「帰りの新幹線の中で、
体育教師が言って
きた。」

第六章 第一話

「親を呼んでるからな。」修学旅行の帰りの新幹線の中で、若い私は体育教師に呼び出されて、そう告げた。若い私は、とても憂鬱になった。新幹線は静岡駅に滑るように着いた。どうして嫌な待ち時間はすぐに過ぎてしまうのだろうか。新幹線を降りて、二列に並んで歩いていると、父の姿が見えた。遠目で見ても、腕組みをして怒っているのがわかる。まさか父が来ると思わなかった若い私は、激しく動揺した。父が出迎え、体育教師が父に何かを説明している。父が体育教師と担任に頭を下げている。若い私は、激しく動揺して貧乏揺すりをするように身体を揺らしている。よく見ると、旅行中に悪さをした連中の親はだいたい呼び出されていた。生徒一行は駅で解散し、若い私はとぼとぼと父の後を歩き、父の車に乗り込んだ。

第六章第二話（前書き）

迎えに来た父の車に乗り込むと、おもむろに父が口を開いた。

第六章第二話

車に乗り込むと、父が口を開いた。若い私は、殴られると身体を固くしていたので、少し拍子抜けしていた。「お前バカだな。何で旅行先で吸うんだよ。お前が中学の時に、まだ早いぞって言っただろ、バカ野郎が。」運転しながら、父が話した。若い私は、すみません。ごめんなさい、と泣いてばかりだった。誰よりも父が一番怖かった。修学旅行で喫煙して捕まった私に下された罰は、停学一週間だった。無期停学にならないだけでもありがたいと思え、と電車で言われた。ここまででは私の記憶と同じだ。嫌な事は全て記憶どおりだった。悔しいけれど。

第六章第三話（前書き）

修学旅行の停学も明けて、季節は足早に移って行った。

第六章第三話

修学旅行の停学も明けて、季節は移り行くスピードを早めた。すっかり夏の気配は無くなり、秋も深まり、冬のような寒さも訪れるようになった。そして、あの人生最大の危機が訪れる。バイト代を貯めて、若い私は、中古のバイクを買おうとしていた。学校の帰り道にあるバイクショップで目当てのバイクを眺める事が、この頃の日課の様になっていた。

社会に出てからは、欲しい物で自分の手が届きそうな物は、借金してすぐにローンで買った。俺は時間を買った、と、屁理屈をこねて、我慢しないで買い物をした。

しかし、この頃の若い私は、ローンなど組めるわけがなく、ひたすらバイトに励むしかなかった。そして、やっとバイクを買えるくらいのお金が貯まった。

第六章第四話（前書き）

特筆して書くことでも無かったので敢えて書かなかつたけど、私は中型免許を持っていたので400ccまでのバイクには乗ることが出来た。

第六章第四話

特筆することではなかったので書かなかったが、私は高二の夏休みに合宿免許で中型二輪（400ccまでの中型バイクに乗れる）の免許を取得していた。もちろん、学校は免許取得を禁止していて、母親も強硬に反対したが、言うことを聞かない息子は、夏休みのある日の朝、俊ちゃんともう1人の連れとで、合宿免許教習所に行ってしまった。そして二週間後に何もなかったかのように帰って来たのである。あのととき、母親の言うことを聞いていれば、あんなことにはならなかったのに。後悔先に立たずとはこのことだな。何度、この諺を使えば良いのだろう。

第六章第五話（前書き）

ある日いつものバイクショップではなく、俊ちゃんの家に近い店に寄った。

第六章第五話

ある日、いつものバイクショップではなく、一度家に帰ってから、俊ちゃんと俊ちゃんの家近くのバイクショップに行った。その店で探し続けていたバイクを見つけた。若い私はどうしてもそのバイクが欲しくなり、予約した。バイクは先に中古バイクを買っていた、俊ちゃんのバイクの色違いで、心配して購入を諦めさせようとする母を振り切り、バイト代を全て注ぎ込み、その中古バイクを買った。あのとき、母の言うことを聞いていれば、あんなことにはならなかったのに。買ったバイクはヤマハのRZ250というバイクで色は黒、俊ちゃんとは色違いだった。本当はRZ350の方を探していたのだが、一目見て、このバイクが気に入ってしまった。

若い私は、毎日バイクを磨いた。いろんな友達がバイクを見に来て、若い私は、有頂天だった。

第六章第六話（前書き）

まさに心に隙があったとしかいいようのない出来事だった。

第六章第六話

好事魔多し、とは良く言ったものだ。浮かれている時は足下を掬われることが多い。注意力が散漫になるのだろうか。

その日、することもない土曜の夜、若い私は家でだらだらと寛いでいた。そこへ俊ちゃんから電話が入った。今夜、いつも練習している楽器屋でライブの練習するから聞きに来ないか、という誘いだ。暇を持って余っていた若い私は、二つ返事で行く約束をした。

俊ちゃんからは、先に楽器店で練習してるから、コージが俊ちゃんの家に来るから、乗せてあげてくれ、と頼まれた。コージは昔一緒にバンドを組んだ仲間だったが、今は、たまに会うくらいだった。若い私は、いいよと軽いノリで請け負って、バイクに跨がって家を出た。風はもう冬の北風だった。

第六章第七話（前書き）

私は妙に胸騒ぎがして若い私と同化して、俊ちゃんの家に向かった。

第六章第七話

私は妙に胸騒ぎがして、若い私と同化して、コージを迎えに俊ちやんの家に向かった。冷たくなってきた風を切ってバイクを飛ばしている、日常の嫌な事はどこかへ飛んでいった。学校の停学措置やみやびのこと、夫婦ゲンカが絶えない両親の事を風の中に置いてこれた。ヘルメットをつけたまま、訳のわからない言葉を叫んでいた。

あつという間に俊ちやんの家に着いた。俊ちゃんの前には、コージが雑誌を読んで暇をつぶしていた。「待たせたな。俊ちゃんのところに行こうぜ。」コージはバイクの後ろに跨がり、「出発進行！」と能天気な声をあげた。私はエンジンをかけて、俊ちゃんの家を出た。

第六章第八話（前書き）

コージを後ろに乗せて、俊ちゃん達がバンドの練習をしている楽器店に向かった。

第六章第八話

コージを後ろに乗せて、俊ちゃん達が楽器の練習をしている楽器店に向かった。そして静岡市内で当時一番大きい交差点を右折しようとして信号待ちをしていた。右折信号が出たので、ゆっくりとバイクを走らせた。

その時、右前方から自転車が飛び出してきた。若い私は、自転車をよけようと必死にハンドルを切った。しかし、自転車の後輪にバイクが当たった。その瞬間激しい目眩が襲ってきた。

私は気がつくと自宅のベッドの上に横たわっていた。自転車とぶつかった衝撃で元の世界に戻ってしまったらしい。時刻は夜中の3時、まだ暑いから、冬ではないようだ。身体を動かして起き上がるうとするが、左半身は不自由だ。この世界は本当に不自由だ。

第七章第一話（前書き）

朝になった。テレビを着けると、2010年の8月の終わりだった。

第七章第一話

朝になった。テレビをつけると時期は2010年の8月の終わりだった。もうすぐリハビリ病院から退院して一年だ。二回目のタイムスリップをしてから一年近く経ったが、まだ車椅子のままだ。リハビリは言語訓練を入れて、週四回行っているようだが、めざましい進歩は自分では感じない、毎日悔しい日々が続いた。2010年の夏は猛暑だった。寝苦しい日々が続いた。毎日もどかしい日々ばかりで悔しさは募った。しかし、劇的には日常は変わらなかった。そして夜になると、あのタイムスリップした世界は、あれからどうなっただろう。私はあの続きを知りたい気持ちがかんたん強くなっていた。

第七章第二話（前書き）

元いた世界はまったくつまらなかつた。

第七章第二話

元いた世界は、まったくつまらなかつた。特に今回は、帰りたいと強く願った訳ではなかつたので余計にタイムスリップしたあの世界が恋しくなつた。あの事故の顛末はどうなつたのか、気になるばかりだつた。あの世界にもう一度タイムスリップしたい、と毎日願う日々が続いた。

あの事故の行方はどうなつたのか？その疑問は強まるばかりだつた。しかし、タイムスリップは起こらなかつた。毎日、成果が上がっているのか、どうかわからないリハビリの日々が続いた。周囲の人々は良くなつてきた、と言ってくれるが、実感は湧かなかつた。そんなある夜・・・

第七章第三話（前書き）

ある夜、いつものようにベッドにカラダを横たえ、タイムスリップを願った。

第七章第三話

私はいつものようにベッドに横たわって、目をつぶって、タイムスリップすることを願った。しかし、何も起こらなかった。また今日も不発か、と眠りに落ちた。すると生々しく鮮明な夢を見た。とても夢とは思えない、鮮明さだった。

私はあの事故の夢を見た。元の世界に戻ってからは、よくあの時の夢を見るが、この時程、生々しい夢は初めてだった。必死になつて目を開けようとしたが、開くことはできなかった。やがて、激しい目眩が襲ってきた。

第七章第四話（前書き）

「今、救急車呼んだから。」
「誰かが叫んだ。」

第七章第四話

「今、救急車呼んだから。」若い男の叫び声が聞こえた。若い私は、激しい動揺から、我を見失っていたが、事故の現場にはすぐに救急車がやって来て、担架でおばちゃんを運び込んだ。そして救急隊員が「今から警察が来るから、ここで待つように。」と言い残して立ち去った。若い私は、ただ立ち尽くすだけだった。とんでもない場面にタイムスリップしてしまった。私はようやく激しい目眩が治まり、とんでもない場面にタイムスリップしてしまった、と驚いた。これは私の記憶どおりだ。ということは、もうすぐ警察が来る。若い私はコージに俊ちゃん達が練習している楽器店に行つて、事故の事を知らせに行くように、小声で言った。やがて、パトカーが姿を現した。

第七章第五話（前書き）

パトカーが近づいてきた。若い私は茫然と立ち尽くしていた。

第七章第五話

パトカーが近づいてきて、呆然と立ち尽くしている若い私のそばに止まり、野次馬と交通整理を行った。そして若い私を促して、現場検証を行った。若い私は訳もわからぬまま、その検証に付き合った。状況を聞きに来たのは、若そうな警官だった。「普段、どこに行ってるの？」若い私は、完全にびびっていた。若い私は、咄嗟に「ラーメン屋で出前のバイトをしています。学校には行っていません。」と嘘をついた。「本当だな。バイクはお前のか？ナンバー控えているから、盗んだヤツならすぐにわかるからな。」若い警官は詰問してきた。

第七章第六話（前書き）

「盗んだバイクではありません。」若い私は震える声で、警官に答えた。

第七章第六話

「盗んだバイクではありません。自分のモノです。」若い私は、震えながら警官に答えた。「そうか。後日、署に来てもらうよ。調書書くから。バイトだからいつでも来れるよな。」警官は若い私をのぞき込むように下から見た。若い私は、こらえきれずに、「すみません。高校に通っています。うそついてすみません。」若い私は、涙を浮かべて答えた。「そうか。後日、家に連絡してもいいが、明日の午前11時に署に出頭しなさい。調書を作るから。わかったな。」わかりました。「若い私は力なく返事をした。「ケガした方は、どこの病院に運ばれたんですか？」若い警官は現場近くの病院の名を言った。若い私は、警官に挨拶して、（轢き逃げではないので連行されなかった。）ケガした人の様子を見に行った。

第七章第七話（前書き）

事故で怪我した女性は40台後半らしかった。

第七章第七話

事故でケガさせてしまった人は、40代後半の女性らしかった。というのは、病院に運びこまれた彼女は、軽い打撲だけだったので、歩いて帰ったようだ、と看護婦から伝えられた。若い私は少し安堵した。信号が変わった出だしで、スピードが出ていなかったのが、幸いしたらしい。若い私は、その足で俊ちゃんたちがいる楽器店に向かった。俊ちゃん達に事故の顛末を話し、若い私は、気が重い家へ帰った。気が重い最大の要因は、父に、この事故のことを知られる事だった。しらばっくれて、話しをしないようにすればよいか、と一瞬思ったが、バレた時の事を考えると、リスクが大きすぎた。いろんな事を考えているうちに家に着いてしまった。

第七章第八話（前書き）

家に着いてしまった。若い私はよい言い訳が見つからず、途方に暮れた。

第七章第八話

家に着いてしまった。どんな言い訳をしようかと考えたが、まったくよい考えが浮かばなかったので、正面突破を図るしかない。若い私は覚悟を決めた。願わくは父がまだ帰ってきていないようにと祈りながら、重い玄関ドアを開けた。若い私は重い足取りで自室へ向かうべく、階段を上がった。予想どおり、母にはこっぴどく叱られ、揚げ句の果てには、泣かれた。不気味だったのは、父が沈黙していたことだった。若い私が一通り事故の顛末を話すと、おもむろに立ち上がり、どこかへ行った。若い私は、延々と、母に説教された。若い私は、正座してうなだれるしかなかった。

第七章第九話

若い私は警察に呼び出されて、事故の調書を取られた。不幸中の幸いで、事故にあつたオバサンは軽傷でもう元気だそうだった。警官に、信号無視をしたオバサンが悪いが、力の強い方が悪くなると妙な慰めをされた。若い私は、これから、学校に知られる事を考えて、落ち込んでいた。警察に行った翌日に学校に行つて、いつ学校から呼び出しを受けるかと、ビクビクしていた。しかし、数日経つても、呼び出しは無かった。若い私は、ラッキーと喜んで、段々と事故の事を忘れていった。

第七章第十話（前書き）

若い私はいつ学校に呼び出されるかとビクビクしていた。

第七章第十話

警察に行った翌日に学校に行つて、いつ学校から呼び出しを受けるかと、ビクビクしていた。しかし、数日経つても、呼び出しは無かつた。若い私は、ラッキーと喜んで、段々と事故の事を忘れていった。

事故から一週間ぐらい経つてから、一通のハガキが届いた。裁判所からだった。家庭裁判所からの呼び出しハガキには、先日の事故の裁判を行うから、出廷するようにとの、居丈高な文言のハガキだった。しかも若い私は更に落ち込ませたのは、未成年は、保護者同伴で来るように、と書いてあったことだった。若い私はどこかへ失踪したくなつた。

第七章第十一話

裁判には、父と一緒にいくことになった。最悪の事態となった。

裁判当日、待ち合わせ室の様な部屋で、父と待機していた。怖そう
なチンピラっぽいお兄さんがお袋さんらしき人と一緒にいた。父は
ずっと不機嫌そうだった。若い私は、いたたまれなくて、この場所
から逃げ出したかった。「学校にはいかないように手を打ったか
らな。安心しろ。しかし、約束どおり事故を起こしたら、バイクを
売るということだったな。約束は守れよ。」父が重々しく口を開い
た。若い私は反論出来る立場に無かったので、ただうなづくしかな
かった。やがて名前を呼ばれて、裁判が始まった。裁判は簡易なも
ので、怖そうなチンピラっぽいお兄さんも一緒に裁判を受けた。そ
の場で判決を言い渡され、免停が言い渡された。

第七章第十二話（前書き）

バイクは約束どおり売った。売った金は、いろいろと迷惑をかけた母に渡した。

第七章第十二話

バイクは約束どおり売った。売った金は、いろいろと迷惑をかけた母に渡した。汗と涙の結晶のバイト代は無くなり、虚しさだけが残った。しかし、学校に事故の事が知れなかっただけでも、幸運だった。バレたら、間違いなく退学だったから。父が何をしたのかわからないが、この事は、今でも感謝している。免停の通知がやって来た。しかし、1日免許試験場で講習を受ければ、免停の期間は一日で終わる。若い私は、学校を休んで講習を受けた。こうして、事故騒動は終息した。そして年があけた。

第八章第一話

高二になった年（1982年）が暮れようとしていた。良いことなど何も無かった年だった。悪いことはてんこ盛りにあつた年だったが。若い私は自分の部屋で音楽を聞いていた。この頃良く聞いていた、佐野元春だった。佐野元春懐かしい名前だ。彼の都会の生活を歌ったお洒落な歌が田舎の若い私をいたく刺激した。この人の歌が、私を都会へと導いたのだった。高二的時は、良く音楽を聴いた。洋楽、邦楽共に良く聴いた。17歳近辺の年頃は、大人でもなく、かといって小さな子供でもなく、身体だけが大きくなったが、非常に中途半端で、自分自身のコントロールがうまくいかない年頃だった。何者にもなれそうだったが、何の力もない学生だった。毎日、歯痒かった。

第八章第二話

新しい年（1983年）になった。若い私は、不遜なことを考えていた。バイト代を貯めて、原付を買おうと考えていた。懲りないヤツである。多分、あの当時仲の良かった友達の大半が原付やないがしかのバイクに乗っていたからであろう。

若い私は、今はまだ、時期尚早だと思い黙々と働いた。雨が降ろうが、木枯らしが吹きすさぶ日もラーメンの出前に励んだ。母も父も、息子がそんな不屈きな事を考えているとは夢にも思わず、真面目にバイトに励んでいる息子に安心していた。若い私は、卒業した中学の近くのバイク屋で、買いたい原付を物色していた。懲りない男である。

第八章第三話

真面目にバイトに励んでいるという表現は少しおかしかった。当時、私に通っていた高校は、バイトも免許取得も禁止だったのだから。ほんの少し、校則を破り中退はしないし、そんな勇氣もない。これぞ、ヘタレの真骨頂である。出前のバイトの行先に、羽振りの良い、如何にも成金というようなでかい屋敷があった。ラーメン屋のマスターに聞くと、建設会社の社長の家で、かなり金持ちらしかった。その奥さんは愛嬌のある、優しい人で、いつもチップをくれた。10年ほど前に故郷へ帰省した際に母に尋ねたら、バブル崩壊で、どこかへ行ってしまったらしい。バブル崩壊は思い出も崩壊させた。

第八章第四話

新しい年になつても、何も面白いことは起こらなかつた。若い私はひたすらバイトに励んだが、時給400円では、原付と言えども、なかなかそれが買えるぐらい貯めるのは、しんどかつた。しかし、17歳というのは中途半端な年頃で、若い私は、訳もなく、いつもイライラしていた。意味もなく、悔しかつた。

毎日、安い時給で気が遠くなるほど沢山働いたお陰で、なんとか原付バイクを買えるぐらいお金が貯まつた。あと一步のところまで彼女もできず寂しい高校生には、バイトで汗を流し、原付を転がすのが似合つていた。

そんなある日、ちょっととした出来事があつた。

第八章第五話

ある夜、一本の電話がかかってきた。電話はあの家の近所に住むミクからだった。若い私は、久しぶりの女の子からの電話だった。しかし、電話の内容は色っぽいものではなかった。少し気落ちした若い私にミクはまた連絡すると言って電話を切った。ミクからは間をおかずに次の日の夜に電話があった。電話内容は、今度、高校の先輩のバイクの後ろに乗せてもらうので、ヘルメットを持っていたら貸してほしいという頼みだった。若い私は、貸してやるから、いつでも取りに来いと答えた。近日中に取りに来ることになった。なんとなく聞きそびれたが、同じ中学のミクと付き合っているはずの彼氏はどうしたのだろう。会った時に聞いてみるかと思いつながら、眠りについた。

第八章第六話

ミクは次の日にヘルメットを借りに来た。久しぶりに会ったミクはどこか綺麗になっていた。中学の時に付き合っていた彼氏とは別れたらしい。男はいつまでもウジウジして未練たらしいが、女の子の方が切り替えが早いようだ。一概には決めつけられないが。高二の三学期も終わろうとしていた。若い私は、バイト代もたまり、原付バイクを買った。幸運なことに父は年明けから長野へ単身赴任していたので家ではわりと自由だった。母は悲嘆にくれた。言うことを聞かない息子にホトホト愛想を尽かしていた。周囲の反対を押しきって原付を購入した。

第八章第七話

振り返ってみると、この世界での高二時代も私が経験してきた高二時代とあまり変わりなかった。しかし微妙に違うところがあるから、やはり違う世界なのだろう。このまま私はこの世界で、透明人間として高三になる若い私の姿を見続けるのだろうか？私は無性にあの彼女に会いたくなかった。私はあの喫茶店であったこの世界に来て、透明人間の私を初めて見つけて、声をかけてきたあの彼女に会うべく、バスに乗り、繁華街をあの喫茶店目指して歩いた。

第八章第八話

あの喫茶店に入った。彼女と初めて会った、入り口付近に佇み、彼女がいた窓際付近を見た。しかし、彼女の若い頃らしい女子高生のグループは居らず、彼女もいなかった。私は、あのデパートの前に行ってみた。今夜が土曜の夜でないことが気にかかったがとりあえず行ってみた。例のデパート前に来たが、誰にも会わなかった。やはり、土曜の夜でないとダメなのだろうか？私は30分ほどそこに佇んでいたが、私と同じような境遇の人間には会わなかった。あきらめて帰ろうとする私の肩を誰かが叩いた。

第八章第九話

肩を叩いたのは、私に元の世界への帰る方法を教えてくれた、あのいけすかない男だった。「もう、土曜の夜にここに来て、誰も来ないよ。」男はシビアに言った。「じゃあ、最近は何集まらないの?」「いや、最近はこの世界に来る人が増えたので、公園に場所を移したんだ。」男は繁華街の中心にある公園の名を口にした。

私は、何故この世界にタイムスリップしてくる人が増えているのかが気にかかった。昔を懐かしむ人が増えているのだろうか?例の公園に向かいながら、そんな事を考えていたら、公園に着いた。さて、公園のどこに行ってみようか?私は昔のお城の外堀の周りを囲む、歩道をブラブラと歩いた。

第八章第十話

私はお堀沿いの歩道を歩きながら、本当にこの公園なのか、と疑い始めた。なにしろこの公園は広すぎるのだ。どこに行けば、私と同じような人々に会えるのかわからずに、とりあえず、自分が知っている、公園の中のテニスコート近くの売店方面に向かった。このテニスコートは懐かしかった。中学の時に、部活の最後の大会の舞台になった場所だった。その売店の前に、数人何やら話しこんでいる人影が見えた。そしてその中には、私が会いたかったあの彼女がいた。

第九章 第一話

その彼女は、私の視線に気がついたようで、人の輪から抜け出して近づいてきた。「久しぶりね。元気だった?」「ああ、なんとかね。君のほうは?」「あなたも見てのとおり、この世界に落ちて来る人が増えたので、このごろ何だか忙しいの。」「何でこの世界に落ちて来る人が増えたのだろうか。私は、素朴な疑問を抱いた。」「何でこちらへ来る人が増えたのだろうかね?」「彼女に聞いても、はっきりした答えは期待できないのに、私は尋ねた。」「そんな事あたしに判る訳がないでしょ。」「予想どおりの答えだった。」「でもね。落ちて来た人がよく言うのは、現実逃避したくなるような事が多く起きはじめたらしいよ。」「それは私がいた元の世界のことなのだろうか。私は最近タイムスリップしてきた人と話してみたくなった。

第九章第二話

「最近タイムスリップしてきた人と話してみたいな。ねえ、セツトしてくれないかな？」私は彼女に頼んでみた。「会って、何を話すの？元の世界の話も聞いてもどうしようもないじゃない？」彼女は私の気持ちを逆撫でするように言った。「まあ、会ってみたいというあなたの気持ちもわからなくもないわ。誰かに当たってみるわ。」そっぴい残して、彼女は売店前の人の輪の中へ入って行った。

最初から素直にそうすれば良いのに、一言多い女だ、とぶつぶつと文句を言っている私の前に、女に連れられて、一人の青年が現れた。

第九章第三話

青年は30台前半、一ヶ月ぐらい前にこの世界へタイムスリップしてきた、と言った。しかし、それよりも私を戸惑わせたのは、彼が元いた世界は、西暦が1999年だということだった。そこは私
が元いた世界とは違う世界なのか。私は混乱した。青年は聞いて
もないのに、自分が元いた世界のことを猛然と話はじめた。「例
の人類は滅亡する、という予言が現実味を帯びてきたのです。天候
が不順で、世界各地で自然災害が起きて、それに伴い、大同士の
戦争の危機も高まってきたのです。」何だかきな臭い臭いのする世
界だが、私の元いた世界も大して変わりはない。いや、同じ世
界かもしれない。

第九章第四話

青年が元いた世界が、この世界と同じように、パラレルワールド（並行世界）の一つなのか、私のいた世界と同じ世界なのかどうかはわからなかった。ただ一つはつきりしたことは、青年が元いた世界は世界滅亡がかなり現実味を帯びているという点だった。「そして最近、私がいた元の世界では、昔というか1980年代初頭を懐かしむ人が増えて、そういう人が増えるにつれて、行方不明や突然、植物人間状態に成る人が急増したのです。」青年の口調は次第に激しさを増した。

第九章第五話

「こちらへタイムスリップしてきた人の多くは元の世界に帰りたがりますが、私は帰りたとは思いません。もう戦争になりそうだから。」彼には、元の世界への未練はないようだった。彼は胸に溜まったものを吐き出してスッキリしたのか、しゃべりたいことをまくし立てたら、足取り軽く、売店前の人の輪の中へ戻って行った。「人選ミスだったかな？」彼女が申し訳無さげに言った。「いや、そんなこと無いよ。ありがとう。」私は自分が元いた世界がどうなっているのかが気になった。

第九章第六話

私は、新しい時のほさまに落ちてきた人達のたまり場所を離れ、公園をあとにした。あの彼女には挨拶はしなかった。私はぶらぶらと街中へ向かって歩いた。これからのことを考えると、元いた世界に戻り、車椅子の不自由な世界よりも、透明人間のこちらの世界にとどまっていた方が、良いような気がしてきた。私が元いた世界に戻ることを躊躇うのは、まさにその不自由という点だった。何か事が起こっても、自分の力では何もできず、親兄弟に多大な迷惑をかけてしまうと云う点だった。何も起こらないかもしれないが、あの青年の世界と同じようになれば、足手まといになってしまう。悩みどころだった。

第二部最終話

もうすぐ高校二年も終わる。そろそろ進路も真剣に考えなければならぬ。しかし、若い私はまだ先の話だとのんきに構えていた。波乱の高校三年時代は間もなく始まるうとしていた。高二の春休みになったが、若い私は特にやりたいこともなく、毎日、バイトか原付に乗ってフラフラと走り回っていた。将来のことも少しは考えて欲しかった。

誰でも、シチュエーションの違いはあれ、この年頃には漠然とだが将来のことを考えるはずだ。しかし、私はこれといって、こんなことをしたいという夢は無かった。寂しい若者である。若い私は将来何かになりたいという具体的な夢はまだ無かったが、漠然と東京の大学に進学したいと思っていた。修学旅行で、ボロクソに言った体育教師を見返してやりたい、というその一念だけだった。まだまだ高校三年の時があるけど、果たしてこの世界でも、東京に行くのだろうか？まあ、「なるようになる」のかな。〈第二部 完〉

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6897o/>

あの日に帰りたい～ 第二部～

2011年2月7日11時17分発行